

Low Serum Inhibin B/Follicle-Stimulating Hormones and Anti-Müllerian Hormone/
Follicle-Stimulating Hormones Ratios as Markers of Decreased Germ Cells in
Infants with Bilateral Cryptorchidism

加藤 大貴（名古屋市立大学医学部附属東部医療センター 泌尿器科）

この度は、栄誉ある優秀論文賞を頂きまして、大変光栄に存じます。その内容を紹介させていただきます。

停留精巣は、幼少期から精子形成細胞数の減少していることが知られています。精巣生検における1精細管断面あたりの平均精子形成細胞数 (G/T) は、造精機能障害の予測因子となり、妊孕性低下リスクの指標として長年使用されてきました。しかし、精巣生検は侵襲を伴うため、生検を行わずに妊孕性低下リスクを予測するバイオマーカーを確立できないかと考え、セルトリ細胞が分泌する Inhibin B と AMH に着目しました。本研究では、停留精巣患者 (片側122例、両側23例) を対象として、血清 Inhibin B, AMH, FSH, LH 値と G/T の関連を評価し、それらの血清ホルモン値から G/T を予測することを試みました。解析の結果、生後24か月までに両側精巣固定術を施行した患児において、Inhibin B/FSH 比の低値および AMH/FSH 比の低値が、造精機能障害を予測するバイオマーカーになることが示されました。一方、片側停留精巣では血清ホルモン値から G/T を予測できないこともわかりました。

本研究は、検体の採取に5年、結果の解析に3年、論文化に1.5年(3誌目でようやく accept) を要し、ようやく publish することができました。この過程で最も印象に残っていることは、査読者とのやり取りです。査読者から厳しくも適切な指摘をうけ、多くの有用なコメントをいただきました。解析を一からやりなおす場面もありました。また、discussion の中のある一文に対して、猛烈に反対されながらも、真摯に意見を下さりました。紙面上で議論をしているようで、こちらも真剣に向き合い、根拠となる論文を探し、書き直しを行う作業を続けました。途中、何度も心が折れそうになりましたが、上司と相談し、指導を受けなんとか形にすることができました。とてもよい経験をさせていただきました。

最後にこの場をお借りして、名古屋市立大学小児泌尿器科学講座の林祐太郎教授、水野健太郎先生、西尾英紀先生をはじめ、腎・泌尿器科学講座の先生方と、選考を頂きました先生方に心より御礼申し上げます。